書評

『法華経為字和訓の研究』を読んで

遠藤好英

はじめに

田島毓堂教授の法華経為字和訓考がまとめられて刊行された。昭和五四年三月に最初の論文が書かれたとある。もう二十年以上も前になる。以来、平成八年まで、毎年、書き続けられてきた、その集大成である。毎号のように頂戴してきた一編一編が、資料を博捜し、丹念な調査を踏まえ、関連する論文を精読したご論であるのを存じ上げていただけに、その出版には心からの祝意を感ぜずにはいられません。

書評を依頼されるままに安易にお引き受けしてしまったのは、教授のご論考に日ごろ啓発されていることに報いるためとの思いからでした。心して読み始めてからは、その中身の豊富さと充実ぶりに感心するばかりで、今でもその全体が十分把握できたとは思えないでいます。ついては、以下の文章は、法華経に不案内の筆者が不案内なままに考え思ったことを書き綴ったものであることを、最初におことわりします。

一．法華経と漢文訓読語の研究

本書は、その書名について次の三点で注意をひく。

一　法華経が取上げられていること。

二　為字和訓の研究とあり、為字一字だけの和訓に考察の対象が絞られていること。

三　どのような立場から考えようとしたのか、明示されていないこと。

法華経といえば、数多くの仏典の中で、もっとも愛好された経典である。渡唐して天台宗を伝えた最澄は、法華三昧を重んじ、天台宗は法華経を依経とした。以来、平安時代の貴族社会では、早く天平時代に始まった法華

会を通じて広く深く受容された。単なる知識にとどまることなく、人間として生きて行く上で役立つ仏教の意味をもったのである。鎌倉時代に至っては、日蓮宗に代表される実践の仏教の性格を強くするが、日蓮は「南無妙法蓮華経」と唱えることを始めた。これは天台法華経の伝統を継承しながら、独自の法華宗を開いたのである。彼の死後、その弟子の間で日蓮宗は分立し、多彩な展開を示して室町期の最盛時代を迎える。江戸時代は幕府の保護政策もあって順調に宗勢を伸ばした。[注1] 近代に入っても、宮沢賢治が熱心な日蓮宗信者であったことなどに伺えるように、法華経信仰は多くの人々に強い影響を与え続けた。

このように法華経が重んじられ読まれ続けたについては、その伝来当初の最澄をめぐる事情をはじめ各時代の状況や相互の関係や変化など、人を含めて多くの問題が考えられる。法華経の影響は、それほどに大きく深い。

宗教を始め、文学や思想・哲学・歴史・社会などさらには美術まで多方面からの考究が期待されるのである。ただ、どの面からの考察にしても、法華経の内容がどのようなものかを中心に、各時代でどのように理解され受け入れられてきたかについての確かな事実を踏まえて行われなければならない。そして、この事は直接ことばの問題に深くかかわるのである。

正しい読みは語のレベルでどのような意味でどう読んだのかの理解が基本であるが、それは文章と有機的につながる語としての理解でなければならない。そうは言っても、宗教書となれば正しい読みは教理という教えの体系抜きにはあり得まい。色読ということもある。とすれば、教理との関わりから特別の意味をもつ語があり、宗派間での読みの違いも生じることが考えられる。ただ、そのようなことは、特別の事情として、説明されることになるのであろう。ことばの問題としては、より広い立場から見た場合を中心に、それとどう違うかが指摘され、説明されることになろう。位相の事実や文体の問題がそこにはあるに違いない。

早く、訓点本の形で読まれ、訓点資料である法華経の場合には、まず第一にことばの研究対象なのである。事実、訓点語の研究に先鞭をつけられた大矢透「法華文句」をはじめとして、その研究は解読が基礎であり中心であった。一例として門前正彦氏『立本寺蔵妙法蓮華経古点』[注2]について見てみよう。

その内容は、第一部本文解読篇、第二部解説研究篇とある。「原文を訓読し、その結果について国語学的考察を試みたもので」（「凡例」による）ある。考察の内容を

項目をあげて示すと、次の通りである。一．ヲコト点、二．仮名、三．漢字の義注、四．音韻、五．特殊な漢字の訓法、六．文法、七．語彙、八．仏説観普賢菩薩行法経の白点、九．寿慶聖人の墨訓。このような内容は、訓点資料についてことばの研究が求める基本的事項といえるものである。

ところで、本書は以上のような事項をおよそ含まない。全体で二部のそれぞれの部の各章の標題は、次に示す通りである。

第一部　法華経為字和訓考

序章　法華経為字訓考序説

第一章　法華経為字和訓考（一）—由・求・当—

第二章　法華経為字和訓考（二）—得・被—

第三章　法華経為字和訓考（三）—定—

第四章　法華経為字和訓考（四）—作・成—

第五章　法華経為字和訓考（五）—是・名—

第六章　法華経為字和訓考（六）—以—

第七章　法華経為字和訓考（七）—与—

第八章　法華経為字和訓考（八）—助・向—

第一部　資料編

第二部　法華経為字和訓考各論

第一章　法華経為為章考

付編「法華経為為章」写真

第二章　為字の読み—法華経訓読における為字和訓から—

第三章　漢字訓——和訓発生の契機としての——

第四章　常用漢字常用和訓——仮名資料としての源氏物語絵巻詞書における——

第五章　法華経為字ベシ訓源流考

第六章　頂妙寺版法華経の改訓——法華経為字和訓考の一環として——

付編　頂妙寺版法華経の成立（頂妙寺各版の写真）

第七章　為字和訓よりみたる法華経訓読

第八章　妙一記念館本仮名書き法華経における為字和訓

第九章　訓読—文化移転の方法—について—二訓読併記の場合を例として—

第十章　訓読法華経と仮名書き法華経と—法華経和訳の経緯を概観し、語彙史の方法を提案し、仮名書き本としての佼正本仮名書き法華経を為字訓よりみる—（仮名本の写真）

第十一章　新資料・日光山輪王寺伝光明皇后筆法華経為字和訓（写真）

第十二章　新資料・日光山輪王寺天海蔵高麗版法華経における為字和訓（写真）

以上、本書の目次の大方を示したが、通覧して本書の書名が「法華経」を冠してはあっても、訓点資料を直接扱ったものではないことが知られよう。これと関係するのは、すでに公刊されている前述の門前氏の解読文と、大坪併治氏の「龍光院本妙法蓮華経古点」の解読文とをもちいている点だけである。本書は、法華経の中の為字についてその訓を考察したものなのである。この為字一字に問題を絞ったことに、私は訓点語の研究史上における歴史的意味を考えさせられるのである。

為字一字の考察に問題を設定することは、法華経点本四十点余について、同時代や時期での違いや異なりを明らかにする共時的研究を行うものでないことを意味すると思われる。加えて、こと法華経について小林芳規博士が指摘したように「漢字についての訓読を逐字的に比較しつつ、全文についての異同を類別するという方法上の利点がある」[注3]けれども、その点本間で変遷をたどる通時的考察を採らないことでもある。平安時代における漢文訓読語の共時的、体系的論著の典型として、築島裕博士の『平安時代の漢文訓読語につきての研究』がある。この面でのその後の研究が、築島氏の述べられるように「文法のみならず、表記法、音韻、文法、語彙、文体等の各面に亘るべきことは当然であ」[注4]ろう。それにさらに歴史的観点からの通時的研究が期待されるのである。小林氏は、仏典について今後の展望として次の三つをあげられた。

1　仏書の訓読語について平安初期・中期から後期以降への変遷の総合的究明。
2　仏書の訓読語における宗派別の訓読の成立、固定とその特徴についての具体的な解明。
3　漢籍と仏書と国書との各訓読史の相関的な考察及び変遷の類型と原理との究明。

法華経に視点を据えながら、訓も為字一字に限った本書の内容が、このような期待にそぐわないのは当然であろう。

「訓点資料における為字和訓」と題した文章の冒頭で、著者は次のように述べられたのである。「為字は頻用される文字である。訓点資料を博捜するとすれば恐らく際限なからう。本章では（第二部第五章（4）—筆者注）次の二資料の恩恵を蒙ってその和訓別に一例づつ掲示するにとどめ、大体を示さうと思ふ。」と。因みに、二資料とは西大寺本金光明最勝王経古点（平安時代初期白点—

春日政治氏『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究本文篇』による）と、興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点（延久三年1071写、訓点は延久をさほど下らぬもの。―築島裕氏『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究訳文篇』による）とである。前者から例示されている和訓は、イフ、カガフル、ス、タスク、ツクル、ナス、ナル、モシ、ヨル、タメ。後者からのは、コレ、サダム、ス、タメ、タメニス、タリ、ツクル、ナス、ナル、マナブ、ヨル、ラルの異なり十六語である。訓点語研究の立場から、本書を見ようとするのは、正鵠を誤ったことになるのである。

ただ、上述のような課題をもっていた訓点語研究と、一線を画す本書の問題設定の立場を、書名についても明確に示す必要があったのではないかと思う。本書を読もうとする者に対して、余計な先入見や予断を抱かせずに済んだのではないかと思うからである。

本書の立場に通じるかと思えることで、私自身の問題として考えられることがある。それは訓点資料の研究につきまとうむずかしい事情に関わる。

訓点資料を直接調査することは、一般には極めて困難だということである。古点本にある仮名やヲコト点、返点などの符号に関する知識が極度に専門性を帯び、その解説、解読さらに索引の作成などを適えるには、大変な時間と労力を要し、多大の経費を負担しなければならないのである。殊にも、解読に求められる緻密な正確さ、鋭敏な判断力など、その能力を身につけるには長い時間の精進を、またその養成には訓練が必要だと考えられるのである。加えて、訓点資料の所蔵は、多く由緒ある名刹であり、一般には近づきがたい場所である。

以上のような事情から、訓点資料はたとい、現物に当たる必要が残るとしても資料そのものの公刊が望まれるのである。訓点語学会の機関誌『訓点語と訓点資料』が、そのような要望に応ずる形式と体裁をもっていることは周知の事実であろう。公刊とは言っても、寺院の許可や印刷、その費用など難問が多いのである。このような困難を克服しながら、訓点資料の研究は進んできたのである。[注5]

明治三六年（1903）、大矢透「法華文句」によって先鞭をつけられた訓点語の研究は、その後、吉沢義則の訓点上の諸符号についての研究とともに、基礎的研究を強固にして研究への新たな意欲を育み、共同研究の機運をも醸成し、昭和二九年（1954）の訓点語学会設立へと事態を進展させた。以来、前に触れた機関誌が発行され、単行の専門書が相次いで出版されて訓点語研究は発展期

を迎えたのである。

その結果は、研究の視野を広げ、新知見を数多くもたらし、国語史研究上の位置を確実にしたのである。そうした推移の中で、築島裕氏の著『平安時代漢文訓読語につきての研究』の果たした役割の大きさは、一時期を画すものであった。

その築島裕氏が、訓点語研究を振返って、次のように述べられた。「その存在が分かっている訓点資料の点数は多いが、その内容が発表されたものは数十点に止まっており、その一々の資料についての内容上の詳細な検討は未だ緒についたばかりであるといへる。」[注6]と。これは築島氏の十四年前のことばであるが、現在でも事情は基本的には変わっていないと考えられるのである。発掘紹介された資料は厖大となり、貴重な調査結果も積み重ねられた。しかし、その内容の詳細な検討や、資料相互の比較、さらに総合的な吟味はまだまだ十分とは言えないのである。この不十分な事態を少しでも前進させるためには、関心興味を抱く人が直接訓点資料を扱うことができるようにすることを第一に、資料の検討や比較を共同で行う体制を作ることが期待されるのである。すでに検討を終えた資料を基に、語彙について訓点語辞典を作成することなども、そのような体制の下に実現が叶えられるのではないかと思われる。

築島氏は、右の文章を次のことばで結ばれた。「又、今後発見の予想される資料も尠くないのであって、真の実質的研究は、寧ろ今後の後進の学徒に課せられた大きな使命であるといっても過言ではない。」と。

以上、訓点語の研究のむずかしさと歩みとを振返ってみたのであるが、改めてこれまでの研究の成果を踏まえ、活用しながら、新しい国語史研究の展望を得たいと考えるのである。こうした思いを込めて、築島氏の言われる後進の研究者への期待は高まるのであるが、田島氏の著書は、それに応えようとしたものの一つであると思われる。本書は、訓点語を視野に入れながら、これを踏まえ活用した意欲的で新しい研究の試みであると考えられるからである。新しさはどこにあり、試みとしての意味はどのような点に考えられるのだろうか。

二　本書の目標と内容

法華経には為字が六一六ないし六一八字ある。本書はこの「為字が漢訳法華経を訓読するとき、どのように訓まれたかだけを追究したものである。」（七九ページ）。法華経の為字の訓読に問題を設定したについて、著者は訓点資料・古点本の四十点余の共時的研究ではなしに、

(24) 浄厳『冠注略解妙法蓮華経新註』（明一如集注に冠注を付したもの）（元禄三年版）
(25) 赤松光映『訓点校正妙法蓮華経』（明治二四年刊）
(26) 『訓訳妙法蓮華経』（法華経普及会編、大正五年刊、昭和三〇年版）
(27) 坂本幸男・岩本裕『法華経』（岩波文庫で上・中・下、昭和三七年～四二年）
(28) 平楽寺版『妙法蓮華経（改正新版）（両点句読）』（万延二年改刻）
(29) 日遠撰『法華訳和尋跡抄』（寛文九年刊、『法華音義類聚　乾』（昭和四六年）による）
(30) 宗淵撰『法華経山家本裏書』（天保一一年刊、昭和三二年複刻）
(31) 注（訓訳・岩波本の版による異同）

以上、著者の集めたテキスト（の一部）を掲げたが、全体で二七点余になる。著者が「本書は、近世近代における和訓も主たる対象に据えてゐる」と述べられた通り、近世近代のテキストが多い。中世以前が少ないが、これらのテキストに指摘できる「為」字に関する情報が、細大漏らさず丹念に記されている。全体で三五六ページに及ぶ。本書の総ページ一三一三ページの二七．一％に当たる。この間、その緻密な作業は終始徹底していて、資料としての確実さと利用価値を高いものとしているのである。

三　第一部の内容と問題点

以上、第一部の資料編を紹介した。この資料を元に書かれているのが、第一部の主要な内容である。「為字和訓考（一）」から（八）になる。（一）～（八）はそれぞれ、法華経の中の「為」字に対する『為為章』の注の漢字による分類に基づく。

『為為章』とは本書第二部第一章で詳しく述べられているが、唐の慈恩大師窺基（六三二～六八二）の著である。この為為章では、法華経の中に出て来た為字の、本文中の為の前後四字を書き抜き、末尾に小書きにしてその為の意味を他の漢字で示している。為字に対する漢字注である。例示すると、「No.1常為諸仏得」となる。こうして、No.618まで示されている。この為の意味に当たるとされた漢字は、全体で十二字となる。それぞれ意味が違い、平声と去声とに分かれ、由、求、当、得、定、被、作、是、名（九字）と、以、与、助（三字）とになる。この十二字を前から順に一字～三字で、八つに分け、それぞれを一章に当てたのである。第一章は（一）―由・求・当、のように。

こうして章分けされた漢字注ごとに「すべての事例を

検討する」ことになる。その内容を考える前に、第一章の最初に置かれた「法華経為字をとり上げる理由」を紹介しておきたい。理由の要点は、次の二点である。

1　為字618字は、出現回数順で第17位、法華経全字数の0.81％で、必ずしも、際立って多い字ではない。しかし、為字については、中国で七世紀以来、重要な語とされ、我が国でもいろいろに訓まれている。加えて、古点本、近世の訓読、音読のための本での注記が念入りで、為字を含む文章の理解に重要な意味を持つ。

2　為字の和訓をたどると、法華経訓読の系譜も浮かび上がってくる。

1は、為字が重要な語で和訓の数も多いことを述べる。これに対する「新鮮な驚き」が「為字考察の最初の契機」であったことも言い添えられている。法華経を選んだ理由にもふれ、それは分量がほどよい、格段に流布している、資料も多いことであると述べられている。これによって、資料も多い法華経の為字の和訓を検討し、法華経訓読の系譜を明らかにするという第一部の構想が考えられるのである。基本的には、資料ごとの為字和訓を指摘し、語形・意味・用法を吟味して異同を確かめ、相互の関係を明らかにすることが推察される。事実、検討や考察の内容を著者自身のまとめについてみると、その具体化が読み取れるのである。

今、第一章の為字当訓のまとめ①～⑫をみてみると、摘記して次のようになる。

①　平安時代の訓点では、漢字注「当」があれば、ほぼマサニとよまれる。

②～⑤　足利本、倭点は類似が著しい。両者の読み方は近世以後のよみには採用されていないが、近代以降の読みと一致することが多い。

⑥　近世近代流布の訓読文は、文段経に発すること著しく、特に頂妙寺版が採用したよみは殆ど採用されている。

⑦　日遠の文段経は「当」をベシと和訓しているが、このよみは日遠が上限である。

⑧　日遠の為字の訓みは、補注に従うことが多い。

⑨　為為章と補注が相違する場合、近世以降のよみは補注に従うことが多い。

⑩　科註板本の為字注は、科註本来のものではない。その由来は分からない。

⑪⑫　ある文字に漢字注が与えられている時その和訓のことばの意味は、持っていた意味とずれることがある。

以上、取上げた資料の為字の和訓や訓読から第一には、資料相互の関係を考えようとされていることがわかろう。第二章の（二）では、被訓為字の訓読を通じて各資料を分類して、著者は（一）平安古訓点、（二）中世資料、（三）近世資料、（四）近代訓読とし、それぞれの関係を次のようにまとめられた。（一）（二）は互いに無関係、（三）（四）は密接な関係がある。（四）の中には（三）とは無関係で、（二）と一致するものがある。この一致は、「即字的に訓」む訓読の姿勢に通じ合うことを意味する。（三）（四）の密接な関係から、文段経・尋跡抄（日遠）→頂妙寺版→近代諸訓読の流れがくっきりしている、というものである。

同じまとめが第四章では次のように要約された。「為為章作訓為字及び、他に作訓のある為字について、その和訓及びそのよつて来たるところを一々検した。ス・ナスは交替の激しいこと、これに対して、タリ・ナルは大体安定してゐること、古点和訓と近世近代の訓が等しく、途中で異訓が生じてゐるものが割合多いことなどをみた。」と。そしてこの第四章からは為字和訓変遷簡易一覧が、それぞれの訓為字一覧に加えて表示されている。

こうして、為字の訓読を時代順に辿りながら資料相互の関係を通じて訓読の流れをみようとする著者の意向が明確になる。そして、この意向が最終的に確認される形でまとめられたと思われる文章がある。

「例言」と「はじめに」がそれで、本書の内容について述べられている。より、詳しい「はじめに」から、著者の意向に関わる部分を一まとまりごとに摘記してみよう。引用は原文のままとし、本文に出て来る順に番号をつけた。

1　為為章に依つて、法華経中の為字が訓読されてゐることが判明した。もつとも、為為章に依らぬ訓読もあり、おのづから訓読の系統の問題と関連してゐた。本書の「為字和訓よりみたる法華経訓読」はこの問題を取り上げる。

2　平安朝の古点本には、為為章による為字和訓がみられるに対して、中世の法華経諸本には全然その形跡のないのが長らく不思議であつた。為字の読み自体ごくごく普通のス・ナス・タリ・ナル・タメに限定される。ただ、段々尋ねていくうちに為為章の影響の見られるものが知られてきた。防府天満宮本の訓点と日光山輪王寺天海蔵高麗板法華経の訓点である。

3　一方、近世になると日遠上人の文段経法華経に端を発して、再び、多彩な和訓が復活する。以後近代の訓読にまで継承される特殊な為字和訓は、ほとんどすべ

て日遠上人に発する。もつとも、近代の訓読には、まれであるが、それに依らない全く独自のものもある。しかし、日遠上人は為為章には依らなかった。為為章を引用したと思はれる『法華三大部補注』（宋　永嘉従義編）による。ただ、「補注」引用のそれは、「慈恩基師別有章門」として引かれてをり、為為章と明記してない。

4　ところで日遠上人文段経の訓法は、明治になつて時宜に合はぬとして改訓された。（中略）頂妙寺版は文段経に依つて訓点を付けたが、漢字訓までは受け継がなかった。（中略）そして、明治改訓の頂妙寺版が広く採用され、今日の訓読は、一部に初版に依るものもあるが、大部分これに依つてゐる。

5　本書は、ただ一字、為字が漢訳法華経を訓読するときどのやうに訓まれるかだけを追究したものである。にもかかはらず、法華経の訓読の歴史がこれに依つて彷彿とする。仮名書きの法華経においてさへ為字の部分がどのやうに訓まれてゐるかを見れば、やはり、為字訓の影響、ないし、その読み方により読みの系譜が分かるのである。

以上の文章から、さらに訓読の系譜を絞ってまとめると、次のようになるかと思われる。

わが国の法華経の訓読は、平安時代に中国の為為章の漢字注を原拠とした和訓が行われ、中世にはそれが辛うじて受け継がれるが、近世の訓読は、日遠上人の文段経に始まり、近代まで継承される。文段経の訓は、法華三大部補注に依っているが、この補注は為為章を引用していると考えられる。この文段経に依りながら、部分的に他の資料によって改めて一層読み易くしたものが頂妙寺版の訓読であり、これが明治に改訓されて多くの訓読に受け継がれているのである、と。著者のことばでさらに要約すると、次のようになる。

近代の訓読には、頂妙寺版が、遡っては日遠上人文段経の影響が絶大であることを知るのである。そして、特殊訓は補注により、補注は為為章に遡ると考へられるのである。

この要約は、第二部第七章の最後の文章になる。最初の「法華経訓読において、為字をいかによんでゐるかといふことを目安にして、その訓読の系譜を立てようとするものである。」に応じた結びなのである。第一部の内容が中古から近代に至る為訓を検討しているものであることは前述した。その検討を通じて著者の述べようとされた意図が、資料相互の関係であり、流れであることも確かめられた。そうだとすると、この第二部第七章の

「法華経訓読」を詳しく、中古から近代に至る為訓と言い換えると第一部の全体になる。ついては、右に見たその要旨はそのまま第一部全体の要旨となる。

ところが、第一部の内容は右の要旨に直接辿りつけるような具合にはなっていない。三七七ページになる量の多さ、それも関係する。取上げる資料の為字漢字注、辞書類の十二語、音義書類の十四語（九一三ページ）、和訓六一語（九〇六ページ）の数は確かに多い。といって、精読してなお右の要旨に辿りつきにくいのには、他に理由が考えられる。それは、「検討する」「考察する」とあって何に基づいて何を検討し、考察するのかが見えて来にくいのである。最初に述べた第三の注意点に関係する。このことを最初の由訓についてみてみよう。

為為章で由訓は序品にある「為人演説由」の一例だけである。それで、「他に『由』を注するものは漢字注を持つ立本、龍本、文段経、尋跡抄、日相本、科註を通じ一つも見られない。」各資料の訓読は「いづれも『人のために』とよみ、与訓さへつけられてをり、」（52ページ）と続く。すなわち、為為章と関係ある資料は一つもないのである。当初の方針に照らして考察の対象にならないと思われる。取上げるならせめて問題点を別に設定して扱うべきでないか。為為章にはあるが、これを漢字注としたわが国の資料がない、これを根拠としたと考えられる和訓もない、このことの意味が問われるべきではないか。それを「由訓のものが他に一例もないので何と訓ずるかわからぬが（中略）「ニヨル」と訓めよう。」と、法華経以外の金光明最勝王経古点に例を求め「その意味を原因・理由をあらはす。」として「ノタメニ」と訓む与訓との異同を検討し、さらに「ノタメニ」の訓みで目的を示す例に準じて考え、ヨルと読んでもよいだろうと述べる。まとめには「少々由訓からはみ出した。由訓の為字はヨルとよむのであらうが、法華経にはヨルとよんでゐる為字はない。由訓とされるNo.17は由訓ではよみにくい。…これを強ひて由訓で「人ニヨリテ演説ス」と理解しようとすればできはする。「演説したのは人によってである」といふことであるが、いささか強弁じみる。上文との関係でもギクシャクする。かう無理することはない。ただ、かうも解釈できることは、同じ為字の和訓であるから当然であるといふことができるかどうか。すぐには答へかねるが注目しておく。」とある。為為章の漢字注がどのような性格や意味をもつかを考えようとするとでもあれば、それなりに理解できる所もあるが、そのような断りもない。しかも、訓の意味を吟味し解釈するのに根拠が示されず、主観的な思考になっている部分が

ある。これは著者が折々用いる「日本語（の表現）として」とか「大漢和辞典には」とかいう言葉からは、多分、時所的制約を越えて日本語を考えようとされているからであろう。この視点は、第二部の訓読を文化移転の方法とする考えにつながると思われる。そうは言っても本書の基本的方向性からは、変遷や時代の差を考えているわけで、両者を一括したまとめや扱いがないままになっている。たとえば、「定訓によつて法華経為字をサダメテと訓んだことは明らかであるが、それが果たして妥当かどうかが問題であつた。」（一八五ページ）としたあと、「但し、サダメテはいかにも定にひかれすぎた和訓ではあらう。上乗の和訓とは決していへない。」と見えるのである。「但し」以下は「サダメテ」と訓まれた以降の語義変化として語史研究の対象となるのではないか。語義変化の一つの契機として訓読があることが指摘されてよいと筆者は考えるのである。

思うに、このようなことは第一部の通時的考察を明確にするための方法が十分考えられていないことに、根本的理由があるのではなかろうか。このことを扱った章は見あたらないのである。

四　第二部の内容

第二部の内容は、第一章が『為為章』の本文について述べる。著者・書名・伝本から書誌・内容、さらに他の資料との関係、その訓、訓考がある。著者によって「法華経為字訓の源泉である」と確かめられた書の解説である。この後に、本書が底本とした叡山文庫本が影印の形で収められている。第二章は「為字のよみ」と題して、その和訓、種々相の説明と、各資料の和訓、さらに為為章にあげる漢字注十四語を、平声去声の順に、それぞれの訓がどう和訓と結びつくかが説かれている。末尾には、為字和訓一覧がある。第三章は漢文訓読における漢字訓の役割と性質について考えられている。いずれもわが国の法華経の訓読の根幹に関わる論であり、本書の原論ないし基礎論と考えられる。そこで、「為字の読み」「法華経為為章」「漢字訓」の順序にして、第一部においたらどうだろう。それに第五章法華経為字ベシ訓源流考、第七章為字和訓よりみたる法華経訓読の二章を加える。第一部の和訓考は各論として第二部とする。そうすることによって、少なくとも読者には本書全体が理解しやすくなると思われるのである。和訓考の詳細にわたって把握しにくい内容を、まずは大まかに捉えることになるので

はないかと思われるのである。

第二部には、ほかに仮名書き法華経についての論が二章あり、為字和訓を見るだけで、おおよそその訓読の系統が知られることが述べられている。現存資料十九本の紹介もある。ともに法華経訓読史を考える著者が（三八九ページ）、仮名書きをもその中に位置づけようとされているからである。深い共鳴を感ずる。

おわりに

本書の内容について大筋を辿り紹介し、知見の及ぶ一二の点について感想を述べてきた。筆者の力不足のために、繁簡よろしきを得ない叙述となり、思い違いによる失礼な言辞もあったかと思う。著者へのご寛恕を希いたい。

最後に、本書が漢字注を和訓の契機と位置づけたことを含めて、法華経訓読における為為章の存在の大きさを明らかにしたこと、近代の訓読には、頂妙寺版が、遡っては日遠上人文段経の影響が絶大であることを明らかにしたこと、典型的な例として為のベシの訓が文段経以来であることを指摘したことの意義を揚言して、筆を擱く。

注1　法華経については、三枝充悳『仏教入門』（一九九〇・一、一九九六・五　第一六刷　岩波書店）尾藤正英『日本文化の歴史』（二〇〇〇・五　岩波書店）を参照した。

注2　門前正彦『立本寺蔵妙法蓮華経古点』（『訓点語と訓点資料　別刊第四』　昭和四十三年十二月）

注3　小林芳規「漢文訓読語史の研究について」（『創立30周年記念　昭和49年春季大会要旨』「シンポジウム国語史研究の現段階と展望」所収）

注4　築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（一九六三年三月東大出版会）一〇ページ

注5　以下の記述は、多く春日和男「国語学五十年の歩み―訓点語研究を中心に―」（国語学会編『国語学の五十年』（平成七年五月　武蔵野書院）所収を参考にした。

注6　築島裕『平安時代訓点本論考　ヲコト点図仮名字体表』（昭和六一年十月　汲古書院）四ページ

〈平成一一年三月二〇日、風間書房、定価三七五〇〇円〉
（宮城学院女子大学名誉教授）